

歌集「時雨」

古荘 巷

苦しまぬ死を願う心うべなひて冬日さす部屋に老人を診る

(昭和五三年)

親しみてわが診つづけし老人のはかなく逝きぬ咽頭を鳴らして

(平成六年)

ひたすらに患者を診つつ五十年指に出来たる打診胼胝あはれ

(平成七年)

定年のなき職業と喜びて今日も診にゆく花咲く道を

(昭和六三年)

百歳を生きし嫗よ冥界に慎しかるや新入りとして

(平成三年)

仏法僧鳴く山奥に診に来ればわが手を頂き老いの喜ぶ

(平成六年)

損すとも嘘するなかれと戒めて四十年経ぬ保険医として

(平成四年)

兵たりし日を偲びつつブンガワンソロ唄えばお経のごとし妻に言われき

(平成四年)

捕虜われら勝者にはばかりレンバン島浮腫とは呼びき栄養失調を

(昭和六〇年)

復員船待ちつつ死にてゆきし友焼きたりゴムの木をかさねては

(昭和六〇年)

年俸を書きたる辞令頂きぬ五十七歳のわれ校医となりて

(昭和五三年)

カーテンに映りて踊るわが手足深夜往診の着替へするなり

(昭和六一年)

一合の麦焼酎にわれは酔い昼診し患者の名を忘れたり

(昭和六一年)

真夜ふけを灯してわれは患者待つ時計の刻む音する部屋に

(昭和六一年)

夜の膳にのれる竹の子露蕨往診にゆきて貰い来しもの

(昭和六一年)

眠剤をのまずにねむり得たりと言う人の喜びを吾はよろこぶ

(昭和六一年)

対話なく日日ある老か往診の吾を尊者のごとく迎ふる

(昭和六三年)

平均余命妻十二年われ七年いづれが先か早きが得ぞ

(平成四年)

爪の色比べなどして妻と吾と朝の炬燵に老後を語る

(昭和六一年)

ポケットより手を出して歩めと戒めし父を思いて坂を下りぬ

(平成六年)

父にわがかつて従ひし如くにも子は職を辞し帰り来と言う

(昭和六一年)

大根を引きたるあとに豆をまかむ子の帰り来む春に穫るべく

(昭和六二年)

新しき医療器械を使ふ子にわが従へど異見ありけり

(昭和六二年)

子と共に並びて診をれば老人はわが前の椅子に來りて掛くる

(平成五年)

子に医院ゆずりて妻と二人住むに電話かかりこぬ日々を喜ぶ

(昭和六二年)

診察の合間茂吉の歌を読む疲れとれるが如き喜び

(平成元年)

医師茂吉あけびの花をいとしみし歌を思へり峡の往診に

(平成二年)

老いの待つ患家に近くなる頃に谷にしろじろと時雨降り 来る

(昭和六一年)

由布岳にまつわる雲のおもむろに白く頭ちつつ年明けそむる

(昭和五一年)

日の出待ちて山頂に焚く篝火の見えがくれつつ木の間を登る

(昭和五〇年)

三方より川注ぎ入る盆地の町初日は霧の中に昇りぬ

(昭和五一年)

父よりも母よりもわれながく生きて一月一日当番医となる

(昭和六三年)

蜻蛉とぶ路地の垣根に白萩の咲きしだるればなき母恋し

(昭和五一年)

珈琲に入るるミルクのおもおもと沈む夕は母しおもほゆ

(昭和五一年)

旅の宿にくつろぎおれば窓に來て鳩がしばしば部屋をのぞくも

(昭和六二年)

春汐の沖さわがしき闇無の浜に貝掘る妻とならびて

(昭和五一年)

台風の一夜荒れたる暁を往診するとき稲田しづけし

(昭和五二年)

節高くなるまで肉のおとろへしこの老は土をふみたしと言う

(昭和五七年)

軟らかくなりたる老の手を握り治らぬ病慰めかねつ

(昭和五八年)

死にぞまを憂ふる老ら日々診つつわが残年に思ひは及ぶ

(昭和六一年)

百歳の嫗語り出づかくのごと干からびてここに生き残りつと

(平成三年)

齊藤茂吉に心酔していた父は五〇歳頃から独学で作歌し毎週、読売、毎日歌壇に投稿していました。平成十七年妹と二人で入選作を蒐集して「時雨」と題して製本しました。一部抜粋して「宇佐市医師会便り」平成二十九年一月および二月号にに掲載させていた  
だきました。

(古荘陽三)